

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04562

研究課題名(和文) 幼児の音韻技能を促進する歌遊びを用いたかな特殊表記の習得支援法の開発

研究課題名(英文) Development of a Method to Support the Acquisition of Kana Special Notation Using Song Play to Promote Young Children's Phonological Skills

研究代表者

垣花 真一郎 (Kakihana, Shinichiro)

明治学院大学・心理学部・准教授

研究者番号：00550724

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：以下、2つの研究を行った。第一に「かな文字の読み習得の基礎的なプロセスに関する理論的検討」である。これは、欧米の「音韻意識と読み習得」という知見を、かな文字に転用してきたことの問題を指摘した理論的研究である。第二に「かな文字の読み誤りデータの分析」である。これは、幼児の仮名文字の読み誤りパターンに影響する文字要因と、その習得過程における変化を検討したものである。音韻的要因、形態的要因がそれぞれ独立に寄与していることとともに、特に形態的要因の顕著な寄与を明らかにした。これを踏まえ、かな文字習得における形態知覚の役割の重要性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、従来、欧米の研究動向に影響されてきた、かな文字習得研究の近年の傾向に再考を促すものであることである。具体的には、これまで、欧米で注目されてきた音韻的要因の陰で等閑視されてきた形態知覚の要因への注目を促すものであるということである。また社会的意義は、かな文字の習得困難児や初期のかな文字学習者への教育実践の改善に寄与するという点である。具体的には、従来の音韻的要因への支援に加え、形態知覚の支援が必要であることを示唆するという点である。

研究成果の概要(英文)：Two studies were conducted as follows. The first is "a theoretical examination of the basic process of learning to read kana letters". This is a theoretical study that points out the problem of transferring the Western knowledge of "phonological awareness and reading acquisition" to the kana letters. The second is "Analysis of misreading data for kana characters". This study examines the letter factors that influence the reading error pattern of kana characters in young children and the changes in their acquisition process. The independent contributions of phonological and morphological factors were found, and the contribution of morphological factors was particularly pronounced. On this basis, the importance of the role of morphological perception in the acquisition of kana letters was pointed out.

研究分野：発達心理学

キーワード：かな文字 読み習得 言語発達 読み誤り

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

かな文字は、文字と音節（厳密にはモーラ）が1対1に対応する音節文字であるが、中にはこの原則から外れたものがある。1つは「だ」や「ば」など符号のあるものである。これらは、文字と符号が合わさって1つの音節を表している。また、もう1つは「きゃ」などの拗音表記である。これも2文字 = 1音節となっている点でかな文字の原則から外れている。これらは、音節文字の基本から外れていることから「特殊表記」と呼ばれている。

かな文字は漢字と比べればやさしいが、発達障害児など一部には困難を示す者がいる。その多くは、この特殊表記の読み書きに困難をもつ。菊地(1995)は、濁音、半濁音文字の読み書きに困難をもつ事例を報告している。大六(2000)は、拗音表記の読み書きに困難をもつ自閉症児の事例を報告している。また、特殊表記は、一般的にも習得されるのが遅い。子どもは3歳の終わり頃からかな文字を読み始めるが、濁音文字は4歳半から5歳頃に習得され、拗音表記は6歳でも正答率は66%程度である(島村・三神, 1994)。このことは発達障害児以外にも相当数の者が、就学後も特殊表記に困難をもつことを示唆している。

2. 研究の目的

本研究は、かな文字の特殊表記の習得支援法を開発することを目的とした。ただし、具体的な目的に関しては、当初、習得支援プログラムの効果測定を目指していたが、研究実施者の所属機関の異動に伴う協力園の不足等により、目的をより基礎的なレベルの問題に絞り、下記の2点とした。

- 1) かな文字の読み習得の基礎的なプロセスに関する理論的検討
- 2) かな文字の読み誤りデータの分析による、かな文字習得メカニズムの検討

3. 研究の方法

以下、上記の2つの研究目的別に方法を述べる。

- 1) かな文字の読み習得の基礎的なプロセスに関する理論的検討
先行研究の文献研究により、現状の問題点と今後の展望を検討した。特に、天野(1970)と大六(1995)の理論的な論争を対象に「音韻意識とかな文字習得の関係」という、この分野における古典的なテーマについて検討を行った。

- 2) かな文字の読み誤りデータの分析による、かな文字習得メカニズムの検討

国立国語研究所(1972)が公開している幼児の読み誤りデータを用い(1)対象文字と誤反応としての文字音の対(以下、正誤対)の発生回数の変動に対する正誤対の音韻類似度、形態類似度の影響に関する検討と、(2)正誤対の発生回数が非対性となる事例(例 ぬ-ね: 240回, ね-ぬ: 80回)の原因を検討した。

また、研究実施者が過去に採取したデータを用い、幼児の文字習得状況と読み誤りの関係を検討した。

4. 研究成果

以下、上記の2つの研究目的別に研究成果を述べる。

- 1) かな文字の読み習得の基礎的なプロセスに関する理論的検討
先行論文の問題点の検証を行い、下記のような問題整理を行った。
我が国のかな文字習得研究は、アルファベットを用いる欧米の研究における知見を「転用」する形で進展してきた。特にロシア、欧米で盛んに研究されてきた「音韻意識と読み習得」の知見の転用は盛んに行われてきた。

かなの読み習得においてもこの知見が転用できるかについては、肯定的な証拠を提出した天野(1970)と否定的な証拠を提出した大六(1995)があり、両者の間で誌上討論も行われた(天野, 1999; 大六, 1999)。

研究実施者は、この問題を再検討し、問題の本質は、欧米における「読み」とかな文字における「読み」の指す内容が異なっていたことにあるのではないかと指摘した。日本の読み習得研究における「読み」とは、「文字の読み」すなわち「文字呼称を言えること」を主に指している。一方、アルファベットにおける「読み」とは、「単語の読み」のこのことのみを指し、「文字呼称を言えること」は決して指さない。

上記の「読み」のずれが、欧米の知見の「転用」においては問題になりうる。すなわち、元々、欧米における「音韻意識と読み習得の関係」とは、「音韻意識と単語の読みの関係」のことであった。ところが、これをかな文字に「転用」した時点で、「音韻意識と文字呼称の習得の関係」となったのである。実証研究の用語に置き換えれば、両者は独立変数は共通していたものの、従属変数が異なっていたのである。

もちろん、かな文字においても、音韻意識と文字呼称の習得の測度の間には、相関関係が繰り返し検出されてきたことは事実である。しかしながら、相関関係があること自体は、因果関係があることの証明とはならない。音節の音韻意識課題の性質(単語の特定の音節を削除したり、比較したりする)を踏まえれば、文字呼称の知識 音韻意識課題という逆の因果関係という解釈も成り立ちうる。

以上をまとめれば、音韻意識とかな文字の文字呼称の習得と、音韻意識 文字呼称習得とい

う因果関係があるかどうかは、現状、十分に証明されていないのが現状である。支持証拠と考えられてきた欧米の知見は、実際には別種の事柄であるので、支持証拠とはみなせないということになる。

研究実施者は、以上を踏まえ、「文字呼称の習得を左右する要因は何か」という問題を改めて検討していく必要性を主張した。また、その際には、性質の異なる欧米の知見を、無理に仮名文字の呼称という別の事態に当てはめるのではなく、かな文字の特質に立脚した研究方略を立てる必要性を主張した。

2) かな文字の読み誤りデータの分析による、かな文字習得メカニズムの検討

幼児の仮名文字の読み誤りパターンに影響する文字要因と、その習得過程における変化を検討した。このテーマでは以下の2つの研究を行った。

研究1では、国立国語研究所(1972)が公開している幼児の読み誤りデータを用い(1)対象文字と誤反応としての文字音の対(以下、正誤対)の発生回数の変動に対する正誤対の音韻類似度、形態類似度の影響に関する検討と、(2)正誤対の発生回数が非対称となる事例(例 ん-ぬ：240回、ぬ-ぬ：80回)の原因を検討した。

(1)については、全2068対を低発生、中発生、高発生の3区分に分け、この区分を目的変数、子音類似度、母音類似度、形態類似度を説明変数とした順序ロジスティック回帰分析を行った。その結果、3変数ともに独立した寄与が認められたが、形態類似度の寄与の程度が他の2変数を大きく上回っていた(Table1)。

Table 1 読み誤り発生回数を目的変数とした順序ロジスティック回帰分析の結果

変数名	B	標準誤差	オッズ比
形態類似度	1.06***	0.07	2.9
子音類似度	0.31***	0.08	1.37
母音類似度	0.27**	0.09	1.31
<i>Nagelkerke's R²</i>	.28		

注. 全ての変数は標準化した上で分析に使用した。*** $p<.001$, ** $p<.01$

また、(2)に関しては、発生回数の大きい正誤対における誤文字は正文字に比べて有意に出現頻度が高く、五十音図の掲載順が早いということが分かった(Table2)。このことは熟知性が低い文字が、熟知性が高い文字に間違えられやすいということを示唆する。

Table 2 読み誤り発生回数が多い方の正誤対の正文字、誤文字の特性値の平均値、標準偏差

	正文字(n=79)		誤文字(n=79)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
文字の出現頻度	1855.43	1414.05	2769.05	1458.10
五十音図掲載順得点	21.18	12.48	29.84	12.36

研究2では、近年採取されたデータを用いて、幼児の文字習得状況と読み誤りの関係を検討した。その結果、形態類似型の読み誤りパターンは、習得前期に多く見られ、形態・音韻類似型の誤りは習得後期に多くなることが明らかとなった(Table3)。

Table 3 習得期別の形態類似型、形態・音韻類似型の読み誤り発生回数の平均値、標準偏差

	形態類似型		形態・音韻類似型	
	習得前期群	習得後期群	習得前期群	習得後期群
	(n=171)	(n=289)	(n=171)	(n=289)
平均値	0.18	0.06	0.15	0.22
標準偏差	0.51	0.27	0.51	0.54

以上を踏まえ、読み習得における形態的要因、音韻的要因の役割を論じた。

引用文献

- 天野清 (1970). 語の音韻構造の分析行為の形成とかな文字の読みの学習 教育心理学研究, 18, 76-89.
- 天野清 (1999). 子どものかな文字の読み書き習得における音節分析の果たす役割 大六一志著論文(“心理学研究” 1995, 66, 253-260) に対する反論 心理学研究, 70, 220-223.
- 大六一志 (1995). モーラに対する意識はかな文字の読み習得の必要条件か? 心理学研究, 66, 253-260.
- 大六一志 (1999). 個々のかな文字の読み, 単語文字列の意味理解, 音節分析 天野氏の反論に対する見解 心理学研究, 70, 224-227.
- 大六一志 (2000). 拗音表記の読み書き習得の必要条件 言語発達遅滞事例による検討 特殊教育学研究, 38, 21-29.
- 菊地 恵美子(1994) 精神遅滞児における濁音の読み行動変容 : 平仮名・片仮名の両者について 特殊教育学研究, 32, 49-57.
- 国立国語研究所(1972). 幼児の読み書き能力 東京:東京書籍
- 島村直己・三神廣子 (1994). 幼児のひらがなの習得 国立国語研究所の1967年の調査との比較を通して 教育心理学研究, 42, 70-76.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 垣花真一郎
2. 発表標題 ひらがなの文字呼称の習得過程 かな文字の特性に着目して
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 垣花真一郎
2. 発表標題 文字読みの獲得に必要な条件と支援
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 垣花真一郎
2. 発表標題 仮名の文字名習得の機序 仮名文字の特徴に根差してー
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 垣花真一郎（分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 384
3. 書名 読書教育の未来	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----